

高山右近・細川ガラシャと大坂

このような形で、「高山右近」や「細川ガラシャ」さん達を通して、皆さんと一緒ができますことを感謝します。

キリシタンを代表する、両輪の花というべき、高山右近と細川ガラシャ。ここ玉造周辺・大阪城周辺は、二人にとって、キリシタンとしての生活の場・活動の場でした。

大坂教会・高山右近屋敷・細川越中屋敷・キリシタン達のことなど、知っているようで、よくは知らないのかもしれませんが。もっと詳しく、正確に知って、彼らの信仰や生き方から、学んでいくことが大切なことのように思います。

大坂と大阪・大坂城・高山右近と大坂・細川ガラシャと大坂・越中井・大坂教会の建設の様子と場所・二人の出会いとは？ ―― などについて、一緒に見ていくことにしましょう。

さて、まず、「大坂と大阪」・土偏の坂の「大坂」と、こざと偏の阪の「大阪」についてですが、400年前、高山右近や細川ガラシャさんの頃の「おおさか」と言えば、土偏の坂の方の「大坂」です。というより、江戸時代までは、少しの例外はありますが、すべて土偏の「大坂」です。

こざと偏の「大阪」になりますのは、明治維新になって、「大阪府」が誕生してからです。

1868年(慶応4年)1月22日、明治新政府の地方官庁としての「大阪鎮台」が設けられますが、すぐ、5日後の1月27日には「大阪裁判所」と改称されます。裁判所といっても、現在の意味とは違って、民政を扱う役所でした。

3か月後の5月2日、「大阪裁判所」は「大阪府」という呼び方に改められました。そして、2週間後の5月15日に、新政府は、各府・藩・県の印章(公のハンコ)を制定しますが、この時のハンコの文字が、こざと偏の方の「大阪府之印」と記されていたわけです。

全国的な「廃藩置県」が行われて、300余りの県が誕生しますのは、明治4年(1871年)7月14日のことですから、大阪府の誕生は、それ以前のことになります。

なぜ、それまで使われてきた土偏が、こざと偏になったのかということについては、次のような話が伝えられています。「**摂陽奇観**」という本に、

“大坂の坂の字を土偏にすれば、土に反(かえ)るとて、忌むべき事なるゆへ、こざと偏に書くなり” そのように記されています。

[土にかえる・土にひっくりかえる]という意味をもつ、土偏の「坂」ではなく、こざと偏には[盛ん]とか[多い]などとい

う意味がありますので、縁起をかついで、ござと偏の「阪」の方を用いるようになった、ということですよ。

次に、「大坂城」のことは見ていくことにしましょう。

城の象徴である天守閣は、天正 13 年(1585 年)に完成しました。そして、築城 30 年目、「大坂夏の陣」の時、慶長 20 年(1615 年)5月7日に、猛火に包まれて、落城してしまいます。

その後、豊臣期のものは、石垣までも、地中に埋められてしまい、痕跡がない形にして、その上に徳川大坂城が築かれます。

徳川二代将軍・秀忠の時に、藤堂(とうどう)高虎が普請総奉行になって、秀吉の頃のものは地下に完全に埋没させてしまい、石垣は2倍の高さに、堀の深さも2倍にして、天守閣の位置も西にズラして、盛り土をして、1626 年に完成させました。

というわけで、現在、見ることが出来る石垣は、根石からすべて、徳川時代に積まれたもので、豊臣期の石垣に積み足したものではありません。豊臣期の遺跡はすべて、地中に埋もれてしまっています。

今見ることが出来る、巨大な石垣石 NO.1 の「蛸石」(たこいし)や、NO.2 の「肥後石」などもすべて、徳川時代のものです。

こうした巨石をどこから運んできたのか、ということについて、「徳川大坂城 東六甲採石場」と呼ばれている一帯を、西宮市教育委員会が調査されています。

このようにして、1626 年に完成した「徳川大坂城」でしたが、この「徳川大坂城」もわずか、39 年後の、1665 年に、落雷によって、天守閣は焼失してしまいました。

以後、昭和6年(1931 年)に、昭和の大阪城が建てられるまでの 266 年間は、大阪城は、天守閣のない城だったのです。「昭和大阪城」は、徳川時代の天守閣のあった場所に、豊臣時代の天守閣に似せて、建てたものです。

秀吉の頃の大阪城の天守閣の姿を伝えている歴史史料は、「大坂冬の陣図屏風」「大坂夏の陣図屏風」他わずかです。

金箔が、黒漆に照り輝く、外観5層・地上7階・地下2階の天守閣の雰囲気は、「夏の陣図屏風」に描かれている天守閣の方がよく伝えてくれていますので、参考にされはしましたが、構造上は不合理な面が多くて、正確さを欠いているようです。建築面から見ると、信憑性が高いのは「冬の陣図」の方ですので、こちらも大いに参考にして、皆さんが見ておられる「昭和大阪城」、昭和天皇の即位を記念して、鉄骨・コンクリート仕上げにした、ござと偏の大阪城が完成したのでした。

というわけで、豊臣秀吉の頃に築かれた、「豊臣大坂城」は、大坂夏の陣で、炎上・残った石垣なども、地中に埋められてしまい、その実態を知ろうとしても、わずかな痕跡しか見つかっていないのですが、文章としての記録としては、宣教師のルイス・フロイス神父が「日本史」という本の中に、しっかり書き残してくれていますので、当時の大坂城のようすが、よくわかるんですよ。

しかも、リアルタイムで、それも、物語・フィクションとしてではなく、記録として残してくれていますので、歴史史料としても、貴重です。

ルイス・フロイス神父が、古代ポルトガル語で記されたものを、川崎桃太・松田毅一のお二人が、全文を完全に翻訳してくださいました「完訳・フロイス日本史」(全 12 巻)が、中央公論新社から、中公文庫として出版されていますので、読むことができます。

その中に記されています内容をもとにして、話を続けさせていただくことにしましょう。

それでは、皆さんを、特別に、豊臣秀吉が築いた大坂城の中へ、ご案内いたしましょう。

当時でしたら、大坂城の敷地内は勿論のこと、ましてや天守閣の中に足を踏み入れるなどということは、出来っこありません。今回は、特別です。

タイムスリップしまして、今日の日付はといいますと、1586 年 5 月 4 日です。実質の禁教令である「伴天連追放令」が出る少し前のことになりますが、イエズス会・日本副管区長の、責任ある立場にあった、ガスパル・コエリヨ神父の一行が、関白秀吉を正式訪問した時に、ご一緒させていただきます。

フロイス神父やオルガンチーノ神父も一緒に、4名の司祭と、4名の修道士、それに同宿(どうじゅく)と言われる人々や、セミナリオ(神学校)の生徒たちも何名か随行しましたので、一行の総人数は、30 名を越えています。

一行は、まず、城下にあった高山右近の屋敷において、関白秀吉に取りつぎがされるまで、しばらくの間、待機しておりました。

「高山右近屋敷」については、ここだと確定することは出来ませんが、「大坂のジュスト右近の屋敷」に、多くの貴人たち(身分の高い人たちが)、説教を聴くために、高山右近に招かれてやって来たということが、別の個所に記されています。

後から話します、大坂教会からあまり遠くない場所にあったと考えられています。

さて、「高山右近屋敷」で一行が待機している間に、先に贈り物を届けました。関白秀吉や、秀吉の母の大政所、それに正室の北政所・ねね などに、贈り物を前もって届けました。

やがて入城の許可が出て、対面の場所となる、桜門を入った所にある「表御殿」へと向かいます。

大坂城の聖域とも言うべき中心部分は、「桜門」を入った中側の領域で、政治・まつりごとが行われる「表御殿」。更に土橋を渡って、「鉄(くろがね)御門」を通過して、秀吉や正室ねね の生活空間である「奥御殿」。そして「天守閣」からなっています。これらが、中心部分にある建物です。

コエリョ一行は、「表御殿」の「御遠侍」(おとおざむらい)と呼ばれる玄関の間でしばらく待ったあと、「御対面所」に迎え入れられます。

諸国の大勢の諸侯・武将たちが整然と着座しています。関白が、奥の上座に、絶大な威厳と貫録を示して、座っています。コエリョがまず入室し、関白に向かい身体を屈めて、敬礼します。一同が、同じように敬礼して入室を終わりますと、まもなく、更に奥にある「御黒(おぐろ)書院」に入るよう、コエリョたち・司祭に命じます。

そして、高山右近に対しては、「汝(なんじ)は、キリシタンだから、伴天連の近くに来るがよい。」と言われて、高山右近だけは、司祭たちと一緒に、入室するように命じます。

ほどなく、種々のくだものを盛った、高い足付きのお盆・高杯(たかつき)が運ばれてきます。

関白は、コエリョのすぐ近く、畳半分ほどの所にまで来て座り、打ちとけた態度で、これから大陸をめざしていると考えている自分の計画のことや、そのために、ポルトガルの「ナウ」と呼ばれる大型船の斡旋を希望することなどを話します。

通訳は、フロイス神父が担当いたしました。

この後、高山右近に先導を命じて、天守閣に向かうまでの城内の部屋や庭園を案内させます。

その間に、天守閣と、財宝を貯蔵してある櫓の、入口の扉と窓を急ぎ開(あ)けさせて、そこからは、関白・秀吉自身が案内役を務めます。

「武器を携えないように」「城内で昇り降りする際には、低い桁(けた)で、頭を打たないように」「今見ているこの部屋には、金・銀・絹糸。あの部屋には、茶の湯の道具。あっちの部屋には、大小の刀剣や、鎧・兜など、武器が充満している。」・・・ 関白・秀吉自身が、このように案内していきます。

ある部屋には、10 着以上の、紅(べに)色の、ヨーロッパ風の外套(カッパ)が吊るされておりましたよ。組立式の寝台もありました。

「黄金の茶室」は、この時は、解体されていましたが、その組立材料一式が置かれている場所も見せました。

天守閣の最上階まで昇り、外の廊下(外廊)にも案内しました。一行は、しばらくの間、外廊に立って、五畿内の諸国を遠くまで見る事が出来る、天守閣からの景観を楽しみましたが、眼の下を見てもみますと、おびただしい数の人々が、まだまだ続く工事をしている最中で、人々は、天守閣の最上部を見ますと、何と、大勢の黒い

礼服を着た伴天連や修道士や同宿たちがおり、更にその中に混じって、関白殿がおられるのを見て、びっくり仰天してしまいました。

天守閣から降りたあとは、関白・秀吉のプライベートな生活の場所である「奥御殿」にまで案内します。そして、何と何と、自分たちの寝室まで見せているんですよ。

また、侍女たちには、「伴天連たちを見れば、出てくるがよい。」と許可を与えましたので、かなりの人数の侍女たちが姿を現わしました。

このようにして、会見は、2時間以上に及びましたが、この日、この時の、コエリヨ神父やその随員に対する関白・秀吉の歓待ぶりは、これまでには例のないほどのものだったのです。

しかしながら、です。この時の、コエリヨ日本副管区長の、政治や軍事に関する、立ち入った、行き過ぎた発言が続いて、コエリヨ本人や通訳をしていたフロイスは気づいていなかったのですが、そばにいた高山右近やオルガンチーノ神父は、はらはらしながら、すぐにも止めさせたいと思いながら聞いていたのです。

案の定、このあとまもなく、1年2か月後、実質の禁教令である「**伴天連追放令**」が出されていくことになるのです。

定(さだめ)

一、日本は神国たる処、きりしたん国より邪法を授け候儀、はなはだもって、しかるべく候

.....

という風に、5か条の条文が続きます。

コエリヨ一行の関白公式訪問が、1586年5月4日。「バテレン追放令」が出されましたのは、天正15年6月19日(1587.7.24)ですから、約1年2か月後のこととなります。

さて、大坂城内のようすを見ていただきましたので、今度は、**大坂城下・大坂城周辺**のようすを見ていくことにしましょう。

ちなみに申しませんが、今お話している時期の秀吉は、豊臣秀吉ではありません。

コエリヨ神父一行が大坂城を訪れたのは、1586年5月4日でしたが、この時期、羽柴秀吉・羽柴筑前守秀吉は、前の年の、天正13年7月(1585年)に、**関白**の官職が与えられます。

「摂政・関白」と言われる、あの関白です。ともに天皇を補佐するつとめをする働きですが、「摂政」というのは、天皇がまだ幼少の頃に補佐する役、「関白」は、成人されている天皇を補佐する、天皇直属の重要なポストです。

しかし、この関白の職は、名門の、藤原家一門の者しかありませんでした。一条家・二条家・近衛家・九条家・鷹司家の者です。そこで、細工がなされます。

秀吉は、近衛家の「猶子」(ゆうし)といまして、いわば形だけの養子の形をとって、「近衛秀吉」として、関白の職につきます。関白・秀吉の誕生です。それに合わせて、秀吉の正室の「ねね」は「北政所」と呼ばれるようになります。

更に、それまでの正親町(おうぎまち)天皇にかわって、15歳の後陽成天皇が即位するのに先立って、関白になった2か月後の天正13年9月9日、**太政大臣**に任官され、「**豊臣姓**」を下賜されることになります。

それまで、姓名と言え、正式には「**源平藤橘**」(げんぺいとうきつ)といって、源・平・藤原・橘の4つの姓しかなかったのですが、5つめの姓として、特別に、「**豊臣**」の姓をありがたく、いただくことになります。

(高山右近の高山や、細川玉の細川というのは、「**名字**」(みょうじ)と呼ばれます。)

「**太政大臣**」といえますのは、政治の面での最高の地位ですから、今で言えば、内閣総理大臣ということになります。

関白・そして太政大臣・そして豊臣秀吉の誕生になるわけです。**関白・太政大臣・豊臣秀吉**。これ以上の要職は、もはやありません。

これが9月のことで、2か月後の11月には、15歳の後陽成天皇の即位の礼が行われました。

このあとは、関白・太政大臣・豊臣秀吉の、思いのままの独裁・専制政治が行われていくことになります。

話をもどしますが、**大坂城周辺**のようすです。

秀吉は、かつての同僚や、全国の領主たちに勝利し、成功を修め、そしてきわめて短期間に最高位まで、次々と昇進を果たしていきましたが、彼は、尚いっそうの、不朽の名声を獲得し、統治ならびに権勢においても、万事、主君だった織田信長を追い越した者たらしめようと決意していきます。

そして、信長が6年間包囲して、やっと、和議の上で手にした大坂・石山本願寺のあった場所に、豪壮な城郭と宮殿、そして、大坂新市街の建設をすすめていきます。

この、信長越えの目的達成のためには、大坂城は、建築の壮大さ・華麗さにおいて、信長の安土城とは比べものにならないほどの、それらをはるかにしのいだものでなくてはなりません。

天守閣が完成したのは、天正13年(1585年)ですが、コエリヨ神父一行が大坂城を訪れた、翌年の1586年にも、まだまだ工事は続けられていたわけで、天守閣の最上階の回廊に立ったコエリヨたちを、工事をし

ていた人たちが、びっくりしながら見上げたという話をいたしました。

大坂城の、天守閣を中心とした、本丸部分は一応の完成をしましたが、それだけがお城ではありません。二の丸の築造工事・惣構の築造工事・三の丸の築造工事という風に、工事は休みなく続けられています。

コエリヨ神父たちが見ましたのは、大坂城の周囲に築いていく濠の工事ですが、訪問の2か月以上も前から始められていたのですが、司祭が都地方に滞在されていた3か月間がたっても、尚も工事は続けられておりました。この濠の工事だけでも、6万人の人たちが動員され、従事しておりました。

濠はすべて、両側とも、石垣です。基礎となる根っこの部分から、一番上まで石で造られますので、とてつもない仕事の量です。工事は、昼も夜も休みなく、続けられていきました。

これらにかかる莫大な費用は、人件費も含めて、すべて、秀吉は一銭のお金も出しません。それぞれ割り当てられた武将たちが、完成までの費用を、すべて捻出・負担していかなくてはなりません。

お金も必要ですが、おびたしい、大量の石が必要です。どこから集めて来ることが出来るのでしょうか。濠の石垣にするわけですから、小石ではありません。

高山右近が運んできた巨大な石が、町の人々の話題になりましたが、六甲山や小豆島の石切場辺りからでしょうか。陸路を1里(4km)・海路を3里(12km)、輸送のために、千人の人手が必要なほどの大きな石で、大坂の町の人々を驚嘆させたのだそうですよ。

あとから話題にしますが、城下に建てられ、高台にあった大坂教会からは、毎日毎日、石材を満載して、淀川の船着場に入って来る無数の船を見ることが出来ました。

いったい、何隻くらいの船が、毎日毎日、大きな石を運んで、この淀川の船着場にやって来たのでしょうか。

正解は、千隻以上です。係りの役人が毎日、川岸に出向いて来て、何隻が、どこからやって来た船なのかを、きっちり記帳していましたので、この数字に間違いはないそうです。

大坂城の天守閣をはじめ、本丸部分の建物、そして、城の全周囲には、石垣と櫓が築かれ、はるか遠くからも眺めることが出来ました。それぞれの建物の正面には、金色の鬼瓦が使われておりましたので、光を反射して、すごく目立っておりました。

このように、織田信長の安土城を超え、関白・秀吉の偉大な名前を後世に残すために建てられた、壮大にして豪華けんらんの大坂城ですが、外観ばかりに目を奪われなくて、そのために労苦した人たちの実態にも、しっかりと目を向けておかなければなりません。

フロイス神父が記されました「日本史」のこぼれを、そのまま紹介する方が、実情を知ることが出来ると思います

ので、そのようにしたいと思います。次のように記しておられます。

「ここで強制労働に服している人々の、信じ難いばかりの労苦・経費、それに苦悩などについて述べてみますと、彼らの多くは、遠くの国・僻地の者であり、かくも多大な経費と責任を負わされて、こうした仕事に参加するには、余裕がありませんでした。そのために、必要な、あらゆるものを国許(くにもと)から取り寄せる外はありませんでした。

このようにして、彼らの仕事場は、大小の刀剣・鉄砲・甲冑・鞍・衣服などで充満しており、彼らは、それらを二束三文で売り払って、必要にあてていたのです。と言いますのは、彼らはたとえ、極度の窮乏に陥っても、実情を関白に具申することも、彼に援助を求めることも不可能だったからです。

それのみか、関白が彼ら武将たちに、今度の仕事において、莫大な経費や労苦を強制したのは、彼らに、謀叛や叛乱を企てる機会や時間や費用を与えさせぬためであることが、あまりに明白でした。

彼らの中には、すでに出すものは出し尽くし、今後、身の立てようもなく、さりとて経済的に援助を求めることも出来ず、己も家臣たちも、滅びて行くことになり、絶望のあまり、この不安や苦悩から救われる方法は、生命と死を取り替える以外にはないと考え、短刀を抜き、切腹して、自殺する者もかなりいました。

ですが、そのような悲惨な状態に陥っていた仲間、あまりにも多かったので、人々はそれを別に驚くべきこととは考えないで、むしろ、彼らは、よくぞ苦しみから逃れる道を見出したものだと言って、そのことを、勇敢で、賢明な行為だと賞讃したのでした。」

以上が、フロイス神父の記した、大坂城築城の背後にある、気づかずに終わってしまう内容の事柄ですが、よくぞ、書き残してくれたものだと思います。

こうしたことを、私たちの頭と心にしっかりと留めておきながら、つづいて、大坂城下のようすを見ていきたいと思えます。

秀吉は、大坂城築城に合わせて、新しい、大坂の町を整備していきます。

一年半ほどの短い期間内に、造営をすすめ、町は、南北一里半(6km)の長さまで、拡大していきました。

巨大な建設プロジェクトが進められていることもあって、食料品・商品・建築材料、そのほか、住民の必需品が集合するように、町の区画の整備もされていきましたので、大坂の町には、あらゆる物品が豊富に揃えられていきました。

日本の主要な貿易港である堺にも通じていますし、京の都にも通じていることもあって、大坂の町は、大きく発展していくこととなります。

秀吉は、諸大名に対して、大坂城の周囲に邸宅を造営するように命じます。

諸武将たちは、今や天下をとった秀吉の顔色を伺っていますから、信じ難いほどのことなのですが、わずか、40日間、ひと月ちょっとの間に、2500以上の領主たちの邸宅・屋敷が完成していきました。ひと月ほどの間にいっきよに、大邸宅街・大邸宅通りが誕生・出現したのですから、これはビックリです。

この2500軒の邸宅・屋敷の中に、高山右近邸・高山右近の屋敷も、そして、あとから登場してきます、細川ガラシャが生活した、細川忠興の屋敷・細川越中屋敷もあったわけです。

さあ、新しい大坂の町は、どんどん整備されて、新しい建物が建てられ、町づくりが進められていきます。

さて、ここで、**高山右近**が動きましたよ。

自らの屋敷も建てていきましたが、それと共に、都地方の責任者であったオルガンチーノ神父に対して、適切なアドバイスをしていきます。

「羽柴殿は、今、大坂での事業に、いとも力を注いでおり、自分から寵遇(大事に)されたいと思う者は、すべからく同所に屋敷を構えよ、と命じておられます。そして、すでに、諸国の主要な諸侯・各地の商人や仏僧たちが、羽柴殿を訪れ、許可を得て、屋敷を設けていっておられます。

されば、司祭方も、彼(秀吉)に、地所の下附を要請し、教会を建てる許可を願い出られますように。」早く、手を打つようと、幾つかの理由を挙げて進言します。

司祭たちは協議の結果、すぐ行動に移されます。

秀吉のもとに出かけて行きましたのは、オルガンチーノ神父・ロレンソ修道士・小西ジョウチン立佐(小西行長のお父さんです。)・そして、秀吉の秘書であった安威シモン了佐の4人です。

秀吉は、まわりが驚嘆したほどの、柔和さと温情をもって対応し、次のように述べて、許可を与えていったのでした。

「伴天連らが、遠国からはるばると、教えを説くために渡来した辛酸労苦は非常なものだ。伴天連の望みを叶え、極上の敷地を進ぜよう。その地は、他の大勢の者に断ったところだ。

申し出た教会の建て方についても、何びとの妨げも受けず、随意に建築することを許可しよう。」

そのように述べて、そのあと、自ら城外に出て行って、与えることに決めた地所に赴き、測量させ、その地所の所有権を、何と、同行していた、秀吉お気に入りの「ロレンソ修道士に与える！」とまで、言ったのでした。

さて、その場所が一体どこなのか、ということですが、次のように記録されていますよ。

「我ら司祭たちに授けられた地所は、大坂では最良の場所の一つであり、秀吉が述べたとおり、多くの諸侯が

求めたが、彼が誰にも与えなかったところであった。その地所の一方は川に沿い、非常な高台となっていて、背後の三方は切り立ち、堅固で、あたかも城塞のような地形をなしていた。どの場所からも、大坂の美しい優雅な眺望がきき、もとより多くの良き鳥のさえずりが聞こえる場所でもある。」—— と言うのです。

さあ、この描写にピッタリの場所はどこなのか、ということですが、淀川(現在の太閤川)にかかる天満橋のたもとが、船着場のあった所なのですが、「永田屋昆布本店」の一角に、「八軒家船着場の跡」の碑が建てられています。

その近くの階段道を登って行きますと、上は高台になっていて、現在、「北大江公園」として整備され、利用されています。大阪府中央区石町(こくまち)1丁目になります。ここは、上町台地の北の端になる場所です。

確定は出来ませんが、ここ以外には考えられないほど、先ほど引用しました文章にピッタリの場所です。

この場所に、高山右近が中心になって、多くのキリシタン達が協力し、今や異教徒の領主になってしまい、他のことに使われてしまいそうな、美しいことで評判だった、河内の「**岡山教会**」(現在の四條畷市にあった教会ですが)を解体して、大坂まで運び、移築していったのでした。

かかった莫大な経費は、すべて、高山右近が自費で責任を持ちました。

そして、1583年12月25日、「降誕祭」(ナタル)の日に、この大坂教会で初ミサがささげられたのでした。

そして、新築された「**大坂教会**」や、近くにあった「高山右近屋敷」を舞台にして、多くのキリシタン達が生み出されていくことになるのです。

大坂城下にあった「**高山右近屋敷**」については、フロイスの「日本史」の中に、3回登場してきています。

大坂教会が完成したのは、先ほども記したように、1583年の12月25日「降誕祭」。当時の言い方で言いましたら「ナタルの日」。今の言い方で言いましたら「クリスマスの日」でしたが、それでは、それまではどうしていたのか、と言いますと、高山ジュスト右近の屋敷が、教会の代わりをしていたのです。

10月に、高山右近屋敷において、多くの貴人たち・身分の高い人たちが説教を聴聞するために、高山右近に招かれて、やってきました。

その内の、主(おも)だった一人は、秀吉の重臣・滝川一益(かずます)の息子です。この若者は、説教を熱心に聞きまして、2か月後に大坂教会が建てられましたら、早速、司祭を訪ねて行って、「自分はキリシタンになる覚悟だから、弟子にさせていただきたい。」と申し出ています。

「高山右近屋敷」のことが出てきます2つ目のことは、1586年の5月4日には、先にも記しましたが、イエズス会の日本副管区長・ガスパルコエリヨ神父一行が、大坂城に、関白秀吉を正式訪問しました時に、関白への取りつぎがなされる間、一行30名は、高山右近屋敷で、待機していたのです。

3つ目は、別の時ですが、高山右近が、関白秀吉それに、右近の茶の湯の師匠であった千宗易(のちの千利休)の2人を、高山右近屋敷に招いて、茶の湯の接待をした——ということも記録されています。

高山右近屋敷のあった場所については、その場所を特定できる内容の記録はありませんが、高山右近屋敷が建てられました時には、右近は高槻城主でしたから、高槻に近い大坂城下の北の方面で、同じく北方面にあった大坂教会からは、そう、遠くはない場所にあったのだらうと考えています。

それでは、後半に入っていきたいと思いますが、前半の時間には、「土偏の大坂とござと偏の大坂」のこと・「大坂城」のこと・その内部のようす・城下のようす・大坂教会の建設の経過・高山右近屋敷のことについて話させていただきました。

あと残っていますのは、大坂教会のことの続きと、「細川ガラシャと大坂」「越中井」「右近とガラシャ・二人の出会いはい？」——ということについてなのですが、それでは、ご一緒に見ていくことにしましょう。

畿内の地方で、もっとも美しい教会堂でありました、四条畷の岡山教会ですが、領主が、ノンクリスタンの領主になったために、別の目的に利用されたり、あるいは破壊されたりする恐れが出てきましたので、その美しい岡山教会を解体して、大坂に運び、見事に移築・再建されていきましたが、このために高山右近が払った、犠牲・配慮・労力と莫大な費用。又、その仕事に従事した多くの人たちの労苦は、多大なものがありましたが、彼らは皆、りっぱなクリスタン達でした。

主なるデウスの栄光を輝かせるために、デウスやキリストに対する「ご大切・愛」の心をもって働きましたので、ごく短期間のうちに、美しく、りっぱな大坂教会が完成したのでした。

大坂教会で初めてのミサがささげられました 1583年のナタル・クリスマスの日には、大坂周辺・近辺の地域からも、クリスタンの男女がたくさん集まりましたので、その数は、驚くほどの数になり、しかも熱心で、信仰深い人たちばかりでしたので、司祭・修道士たちは、大変、感動いたしました。

もとより、教会という所は、クリスタン達だけのものではありません。まだキリスト教の信仰をもっていない人たちも、多数、説教を聞きにやって来ましたが、教会のフイキが、何とも、気品があって、くつろぐことが出来る、絶好の

場所でしたので、大勢の人たちが、昼夜を問わず、教会にやって来ました。

そういう人たちに対して、説教を担当していました修道士たち・イルマンたちは、あまりに多くの人たちでしたので、すべての人たちの要求に応じていくには、時間も人手も足りない有様でした。

しかも、加えて、今や大坂の町は、日本の政治や経済の中心になっていますから、全国から、大多数の武将たちや家臣たち、使いの者たちが、大坂の町にやってきます。そして城下の各屋敷に立ち寄りつたりします。

そういう人たちは、かねがね噂に聞いている、美しくりっぱな大坂にある、キリシタンの教会がどんな所なのか、大坂に行った時には、訪ねていくことを楽しみにしていました。

ある者は、観光気分でやってきます。またある者は、話される説教が、耳新しい内容のものでし、しかも、結構役に立つ内容ですので、さらに大勢の人たちが、教会にやって来るようになりましたし、しかも、見物だけではなくて、語られる説教を聞いていこうという者が増加していききましたので、時には、教会内の4つの場所で、同時並行して、4人の説教者が話をしていかなければならないというほどでした。

こうしたことが、毎日、繰り返される中で、神のことば・説教を聞いた人たちの中から、聞いたことを理解し、決心し、キリシタンになり、洗礼を受けていくという人たちが出るようになっていきました。その人たちのことを紹介してみよう。

- ① 年齢 18・9 歳の身分の高い若者。秀吉の側近で、彼はキリシタンになる前は、残酷で、人を殺すことを好み、世俗の虚栄と快楽を追い求めていましたが、受洗後は、まるで生まれ変わったようになり、身につけていた一切の悪から離れていきました。
- ② 今述べました①の若者がキリシタンになったことに驚いた、同僚たちが、その若者にすすめられて、大挙して、教会にやって来て、10 名～12 名の秀吉の側近の若者たちが、キリシタンになりました。
- ③ 秀吉の馬廻衆の頭・秀吉に随行する騎馬隊の隊長で、**牧村兵部**という人がいました。この人は後ほど、千利休の七哲・「利休七哲」に数えられるほどの人でしたが、この牧村兵部に①番に紹介しました若者や、牧村兵部の親友であった高山右近も一緒になって、熱心にすすめましたので、彼は、大坂教会にやって来て、熱心に説教を聞くようになりました。そして、ついに、キリシタンになる決意を固め、洗礼を受けました。

彼は、洗礼を受ける前には、大勢の女性たちを妻や側室にしていますが、受洗後は、最初の女性一人だけを正妻として残して、他の女性たちとは別れていきました。また、ほかの多くの悪い習慣に染まっていたが、それらとも訣別していきました。

そして、彼に仕えている家臣たちに次のように言いましたよ。

「汝らは、今までは、罪に染まった私を見倣ってきたが、これからは、汝らの生活を改め、事を処するに当た

っては、すべてにおいて、キリシタンになった、今の私を模範として学びとるように。さらに言うが、誰であっても、たった一人しか女性をかかえてはならぬ。」

※ この時期のことですが、50名以上の人たちが、大坂教会において洗礼を受けていきました。ほとんど全員が、身分の高い、貴人たちでした。

④ おもだった領主の一人が、高山右近の語る話や、右近との交際の結果、大坂教会に説教を聞きに行き、教えをよく悟り、受洗して、アゴスチノという霊名・洗礼名を与えられました。(小西行長も、霊名はアゴスチノですが、小西行長とは別の人です。)

彼は、家臣たちに信仰を勧めましたので、100名ばかりの者たちが受洗いたしました。

⑤ 100名の兵士を指揮する備前の国の武将も、洗礼を受けました。

⑥ 有名な**蒲生氏郷**です。織田信長は自らの娘を、氏郷に嫁がせています。

高山右近と親しく、右近の人柄や天性の素質に敬意を表していましたが、右近が、何かにつけ、デウスのことを口にし、まわりにいる武将や若侍たちを、キリシタンにしようとして話かけてきますので、氏郷は、そのことを快く思っていないので、右近を避けるようになっていきました。

右近は、氏郷のことを、大切な友人だと思っていましたので、彼のために、絶えずデウスに祈っていましたし、大坂教会の司祭たちに対しても、是非祈ってくださるようにと、願いをしていました。

それともう一つ。先に信仰をもってキリシタンになっていた親友の、牧村兵部にも応援を頼みました。牧村兵部と蒲生氏郷も、大の親友でした。

このようにして、だんだん氏郷は、デウスのことやキリシタンの教えに興味をいだくようになっていき、ついには、氏郷の方から、昼夜、右近につきまとい、デウスの話をしてくれるように、あるいは、教会で聞いた話の中身のことについての疑問に答えてくれるようにと、頼んでやまないほどになっていきました。

そして、やがて、すべてのことをよく理解し、納得した上で洗礼を受け、レオンという霊名・洗礼名をいただきました。**蒲生レオン氏郷**。

尚、千利休のじきじきの7人弟子・「**利休七哲**」と言われる7人の中に、この蒲生氏郷も高山右近も牧村兵部も入っているのですよ。

⑦ つづいては、**黒田官兵衛孝高(よしたか)**です。

彼の心を最初に動かしたのは、キリシタンであった小西行長・小西アゴスチノ行長です。それを受けて、蒲

生レオン氏郷と高山ジスト右近が、官兵衛を受洗へと導いていきました。官兵衛は、この時は、まだ名字は小寺でしたが、**小寺シメアン官兵衛**となり、その後、多くの侍たち・武将たちにキリストのことを伝え、影響を与えていきました。

たしか、来年(2014年)のNHK大河ドラマの主人公になるんですよ。期待したいと思います。

- ⑧ 播磨の国の三木城主がキリシタンになり、洗礼を受けていきました。
- ⑨ 越前の国から使者としてやって来た若者が、信仰をもって洗礼を受けていきました。
- ⑩ 稀有の品性を備えた一人の人がキリシタンになり、洗礼を受けました。又、その人を通して、三河国にいた一貴人と、義理のお兄さんが信仰をもっていきました。名前は記録されていません。
- ⑪ 別の高貴な・身分の高い若者もキリシタンになって、洗礼を受けていきました。そして、信仰面で高山右近のよき協力者となりました。

実を言いますと、キリシタンにはなりそこねましたが、関白・秀吉自身、大坂教会にやって来ているんですよ！

コエリヨ・日本副管区長一行が、大坂城に、関白秀吉を正式訪問した話をしましたが、その数日前に、秀吉は、事前に、教会のことを知っておく必要があると考えたのでしょう、織田信長の息子や、他の武将を伴って、突然、大坂教会を訪ねて来ました。そして、祭壇近くのタタミの上に座りまして、司祭を近くに呼び、祭壇に置かれている救世主・イエスキリストの像について、「あれは何か？」と質問して、司祭がその問いに答えています。

そして、皆の前で、次のように言いました。

「予は伴天連たちが、大坂城の河向うに住む大坂本願寺の仏僧より正しいことを、よくわきまえている。なぜなら、貴殿らは、仏僧とは違って、きよい生活を行ない、仏僧や他の僧たちのように、汚れたことをしない。この点、貴殿らは、彼らより優れていることが、よく判り、予もまたキリシタンの教えが説くところにことごとく、満足している。

もし、貴殿らが、多くの女性たちをかかえることを禁じさえしなければ、予はキリシタンとなるのに、別に支障ありとは考えておらず、その禁止を解くならば、予もキリシタンになるであろう。」そのように語った後、かなりの時間を教会で過ごして、帰っていったのでした。

この時のことではありませんが、同じ内容のことを、冗談半分に**ロレンソ修道士**に話した時に、ロレンソも同様にからかい半分に、次のように答えました。

「殿下、私が許して進ぜましょう。キリシタンにおなりください。なぜなら、殿下だけが、キリシタンの教えを守らず、地獄に行かれることになりましても、殿がキリシタンになられることによって、大勢の人がキリシタンになり、救われるからでございます。」

このロレンソ修道士の答えを聞いて、秀吉は大声を出して「ワッハッハ」と笑い、満足そうだったということです。

このようなことを話していけば、キリがありませんが、先に信仰をもった多くのキリシタンたちが、それまでの墮落した生活を一変して、女性関係・快樂・非道・不正義・残忍・その他の悪に染まっていた生活を放棄していききました。

大坂教会において、司祭たちから洗礼を受ける者が続出し、又、洗礼を受けた者たちが、大坂から地方に帰って信仰を伝えていくという感じで、大坂教会が、いわば、他の諸国にキリスト教が広がっていくための、一種の人材養成所・セミナリオになってきたということは、過小に評価されるべきではない —— そのように宣教師たちは考え、「このことに大いに慰められ、喜んでもある。」と、フロイス神父は「日本史」の中で記しています。

しかし、前にも言いましたように、このような状況は、「伴天連追放令」が出るまでのことで、実質の禁教令である「伴天連追放令」が出されましたあとは、事態が一変してしまうことになります。

さて、「細川ガラシャと大坂」に入っていきます。

今の「北大江公園」にあったと思われる大坂教会ですが、実は、細川玉（まだガラシャではありません。）が、生涯にたった一度だけこの「大坂教会」を訪れています。

1587年3月29日（日）の、「復活祭」の日。当時の言い方で言いましたら、「パスコア」の日です。今から426年前の、復活祭・パスコアの日に、細川越中屋敷をこっそりとぬけ出して、大坂教会まで出かけていっておられます。教会なるところに行かれたのは、生涯でこの時1回きりです。

皆さんも、一度、細川ガラシャさんのことを思いながら、細川越中屋敷があった、玉造の「越中公園」から、大坂教会があった、天満橋の近くの「北大江公園」まで、ウォーキングされるのも、いいのではないのでしょうか。

細川玉・後の細川ガラシャは、明智光秀の娘（二女とも、三女とも言われますが）で、15歳の時に、織田信長の執り成しによって、細川藤孝・幽斎の嫡男・与一郎（後の細川忠興）と結婚いたしました。

時は、1578年（天正6年）のことで、しばらくは細川家の居城の、長岡京市にある勝龍寺城ですが、2年後（1580年）に、細川藤孝・忠興父子は12万石を拝領して、丹後の宮津城に移り住んでいます。

その頃の細川玉は、どんな女性だったのでしょうか。20歳前・17～19歳頃の細川玉です。

玉のしゅうとの細川幽斎は、文武両道にすぐれた人で、和歌をよくし、又、「古今伝授」と言って、古今集の、正統的な解釈を伝授できるほどの、学識がある人で、禅宗にも通じていましたから、宮津に移ってからも、城の近くに禅宗の僧院を建立させて、一家で、ほとんど毎日のように、お参りをし、僧侶の話を聞き、教えを受けてお

りました。

玉も、嫁として、一緒に出かけておりましたが、彼女は、才能と、天賦の博識において、他の誰よりも一段と秀（ひい）でておりました。

後に、キリシタンになった玉が、当時のことを思い出して、次のように語っています。

「当時、私が修行によって会得しましたことは、私の精神を、まったく落ち着かせてくれたり、良心の呵責を消し去ってくれたりするほどの強いものでも、厳しいものでもありませんでした。

それどころか、私に生じてきたとまどいや疑問は、後を断ちませんでしたので、私の靈魂は、深い疑惑と暗闇の中に陥っておりました。

私はそれらの疑問に答えるためには、仏僧たちの教えでは、十分でないということを感じてはいましたものの、だからといって、より豊かな光と、より堅固な教えを示してくれる者としては、おりませんでしたので、仏僧たちによる救済に頼らざるを得なかったのです。」

そのように述べているのですが、若き細川玉の、真摯な、求道の思いが伝わってまいります。

この後、1582年に、本能寺の変があり、明智光秀の娘である玉は、丹後の山奥の**味土野**に、2年間幽閉されます。どのような、人も通わぬ隠れ里・味土野での2年間だったのでしょうか。玉の心の苦しみ・悩みは、想像を絶するものであったと思いますが、記録としては、残されてはいません。

作家の三浦綾子さんが、小説「細川ガラシャ夫人」の中で、この間の玉のことを、取り扱っておられますが、一度お読みになるのも、いいのではないのでしょうか。

2年後の、1584年(天正12年)に、秀吉の赦しが出て、玉は、大坂玉造の細川邸・越中屋敷に呼び戻されます。この辺り・「**大阪クリスチャン・センター**」の近くが、細川玉の生活の場所となっていきます。

ここ、「大阪クリスチャン・センター」から北へ進んでいきますと、「大阪女学院」。もう少し進んでいきますと「**聖マリア大聖堂**」。そして、聖マリア大聖堂の一部も、越中屋敷の一部だったようですが、大聖堂にとなりあって、「**越中公園**」があります。ここです！ここが、細川越中屋敷のあったところです。

ここにあった細川越中屋敷で、細川玉は、1584年～1600年までの16年間を、すごしました。この屋敷で洗礼を受け、細川ガラシャとして新生し、新しく生まれ変わり、そして、この屋敷で最期の時を迎え、天に召されていかれました。

この屋敷から外へ出られたのは、天満橋の近くにあった、大坂教会に行かれた時、1回きりです。

「越中公園」の案内板には、ひとことも、こうしたことは書かれていないのですが、道路をはさんで、「井戸の辻」と

言われている場所に、大阪府史蹟指定第1号の「越中井」があります。

今から79年前・1934年(昭和9年)に、地元の越中町内会の皆さんが中心になられて、碑が建立されました。

「越中井 細川忠興夫人 秀林院 殉節之遺址」(秀林院ではなく、ガラシャとしていただきたかったですが)という碑文と、ガラシャ夫人の辞世「散りぬべき 時知りてこそ 世の中の 花も花なれ 人も人なれ」の歌が刻まれています。縦188cm・横37.5cmの、りっぱなものです。是非、実物をご覧になってみてください。

もうひとつと言えば、大阪カテドラル・聖マリア大聖堂の入口には、安部政義さん・作の、左に高山右近・右に細川ガラシャの彫像があります。聖堂の中に入りますと、正面の聖母マリアの足もとにも、堂本印象さんが描かれた、お二人の絵があります。これも是非、実物をご覧になってみてください。

そして、聖堂内で、祈りの時を持たれましたら、すばらしいと思います。400年前の、高山右近や細川ガラシャさん達・キリシタン達と同じ信仰に生きているのだ！——ということを実感することが出来ると思いますよ。お勧めです。

ところで、玉造の越中屋敷に戻ってきからの玉ですが、秀吉の赦しが出たこととはいえ、夫・忠興にとっては、逆臣・明智光秀の娘・玉を、大坂城と目と鼻の先の場所での、日々の生活の中に迎え入れたわけですから、いわば、爆弾を抱えているようなものです。ちょっとでも、玉にかかわることで、よくない噂がたったり、不祥事があつたりしましたら、細川家存亡の一大事になってしまいます。

忠興は、妻・玉に対して、異常なまでの、徹底した防御措置をとっていきます。よく言われているような、「玉が美人だったから」とか「忠興が、しつと深かったから」などといった、低レベルの理由からではありません。細川家の、そして、自分自身の存亡がかかっていることなのです！

徹底した防御措置の中身です。

- ① 身分の高い2人の家臣に、昼夜不断に、妻の監視を義務づけます。
- ② 忠興が外出する時、特に、出陣する時には、いかなる使者が家に入り、又は、いかなる女たちが家から外出したか、そして、誰が彼女らを出させたのか。又、彼女らはどこへ行ったのかを厳しく観察し、その月日を記録して、書面によって報告するように命じます。
- ③ ごく親しい親戚か身内の者でない限り、妻に対しては、いかなる伝言をも許しませんし、又、たとえ許される伝言でも、まず監視の2人の家臣の検閲と調査を受けるように、と命じます。
- ④ 屋敷にいる女たちは、それぞれが起居するための場所があてがわれており、特別の命令なくして、勝手に、互いの部屋を行き来することを認めません。

妻の玉に対しても、屋敷内のいくつかの特定の部屋以外に、出向くことは許しません。

- ⑤ 調理場などで働く者たちにも、それぞれの行動を規制する掟が与えられており、それを破る者の対しては、仮借のない厳罰が科されましたので、皆(みんな)は、文字通り、それらの掟を守ることに務めました。 ……等々々

というあいですので、一体、**高山右近と細川ガラシャの出会い**はあったのだろうか？ という疑問に対しては、高山右近が、いかに細川忠興の最大の親友であったからとしても、一触即発の原因となる恐れのある妻を、右近の前に、挨拶のために召し出させるなどということは、とても考えられません。

しかし、こういうことはありましたよ。

右近と忠興は、最大の親友であったわけですから、忠興の口から、右近が彼に話して聞かせたデウスの教えに関することとか、説教のこととかを、玉にも話して聞かせました。

玉は、それらの話を夫から聞かされた時に、それらのことをもっと深く知りたいとの、異常なほどの望みに駆られたようですが、たとえ夫に、教会へ説教を聞きに行く許可を願ったとしても、とうてい許してもらえないと思われましたので、彼女は、そ知らぬふりをしていたそうですよ。

というようなわけで、「右近と玉」「ジュスト右近とガラシャ玉」との出会いは、フィクションとしてのドラマの中ではあったとしても、実際には、考えることは出来ません。

とは言いましても、2013年の今は、**天の御国(天のパライゾ)**で、右近さんも・妻のジュスタさんも・お父さんのダリオ飛騨守さんも・ガラシャさんも……その他、殉教していった多くのキリシタン達も ……みんなみんな、天のパライゾで、ご一緒されているんですよ。

そして、いつの日か、私たち夫婦も、天国で、右近さんやガラシャさん達とお会い出来るのを、楽しみにしています。

皆さんは、大丈夫ですか？ **天国へ行けますか？** 天国で、右近さんやガラシャさん達とお会い出来るでしょうか？

細川玉は、玉造の越中屋敷にあって、夫・忠興から聞かされた、高山右近様が語られたという、キリスト教に関する話を、もっと深く聞きたい・知りたい・そのためにも教会へ説教を聞きに行きたい、という強い望みに駆られていたわけですが、千載一遇の好機会・チャンスが与えられました。**1587.3.29(日)**、日本ではお彼岸の時季で、教会では、ちょうど、**復活祭(パスコア)**の日でした。

夫・忠興は、関白秀吉に従って、九州の島津攻めのために出陣しておりました。夫の命令で、昼夜、邸を監視していた番兵たちに気づかれぬように、気心のわかった6～7名の侍女たちに、まわりを取り囲まれるようにし

て守られながら、しかも人通りの少ない、奥方が鍵を持っている脇の門から外へ出ました。正午すぎでした。

玉造の越中屋敷から、谷町筋を通過して、天満橋の近くにあった大坂教会までやって来ました。天満橋は、この頃はまだありませんでしたが、淀川の船着場の近くにあった大坂教会までやって来ましたよ。玉にとって、初めて見る、美しい教会です。祭壇の造り・正面に飾られている救世主、イエス・キリストの肖像・室内の装飾等々々 …… どれもこれも、玉は、非常な満足を感じました。

説教担当の、高井コスメ修道士が外出していましたが、大分の時がたって、帰って来ました。

時間がありません。玉は、多くの質問をし、又、靈魂の不滅のことや、その他の問題について、教えを乞いながら、それまで信じてきた禅宗との違いを、はっきりと理解して行きました。

そして、自分は再びここに来ることの出来ない身なので、洗礼を、今すぐ授けてほしいとも、何度も両手を合わせて、その願いを繰り返しました。

大坂教会の主任司祭は、セスペデス神父でしたが、りっぱな身なりの、この女性の身分がわからず、閑白の側室でもあったら、後日、大変なことになりますので、この時は、思いとどまらせました。

このあと、外出したことが発覚して、ますます監視が厳しくなって、二度と外出することは望めなくなりましたので、何かと理由をつけては、侍女たちに教会に行かせて、疑問に答えてもらい、「コンテムツスムンジ」(キリストに倣いて)という本の筆写本を届けてもらったりして、玉は信仰を深めて行きました。

洗礼を受けることが出来たのは、4か月後になります。

同じ年・1587年の7月24日に「伴天連追放令」が出されましたが、その直後、宣教師たちが日本からいなくなってしまうという知らせを受けて、是非に、と願い出ます。

教会での受洗はムリですので、侍女頭であった清原枝賢(しげかた)の娘・イト、キリシタン名マリアに、セスペデス司祭が、洗礼の授け方・式の言葉・心構えなどを教えた上で、彼女の手によって、越中屋敷において、玉が普段、祈りをささげている部屋の聖なる肖像の前で、ひざまずき、両手を天に挙げ、マリアの手によって、聖なる洗礼を受けることが出来たのでした。

そして、彼女には、ガラシャ(恩寵・神の恵み)という霊名・キリシタン名が授けられました。

最後に、細川ガラシャ玉の最後の時のことをお話して、今回の学びを閉じていくことにしましょう。

細川ガラシャの召天・天に召されていかれましたのは、1600年、関ヶ原の合戦が起こる直前のことです。受洗して13年目のこととなりますが、ガラシャは、常日頃から、戦国武将の妻の習わしとして、自害せねばならない

事態に陥った時には、自殺行為を、重い罪として許さないキリシタンの教えがある中で、どのように対処すべきなのか、司祭に相談していたことが、亡くなる4年前・1596年のフロイス神父の手紙の中に記されています。

ガラシャ自身、何年も前から、最期の日に備えての心の準備のみならず、とるべき手段を考えていたことが判ります。

1600年(慶長5年)、細川忠興が、徳川家康に従って上杉攻めに出陣していた折、大坂城の石田三成は、諸大名の妻女に、登城を命じました。それが、人質を目的としていることは明らかでした。

細川屋敷に三成の使者が訪れました。重臣・小笠原少斎は、主君忠興の命令もあって、ガラシャ夫人に、最期の時に立ち至ったことを告げました。

ガラシャ夫人は、ふだん礼拝している部屋に入り、ひざまずいて、何度もイエス・キリスト、マリアの御名をくり返し唱えながら、自ら、髪をかき上げ、首すじをあらわにしました。その時、一刀のもとに首(こうべ)が切り落とされました。

家臣たちは、夫人の遺骸を絹の衣でおおい、その上に火薬をふりまいて、火が放たれました。豪華な越中屋敷は、たちまちにして、火の海と化していきました。

ガラシャに仕えていたキリシタンの侍女たちが泣きながら、教会のオルガンチーノ神父のもとに、悲しい報せを伝えました。司祭は、一人のキリシタン女性に幾人かのお伴をつけて、焼け跡の細川屋敷に向かわせ、ガラシャの遺骨数本を見つけ出させました。

教会では、人々の悲しみのうちに葬儀ミサが行われ、ついで遺骨は、**堺のキリシタン墓地**に埋葬されました。

夫・忠興は、大坂に帰ってきた後、ガラシャの遺骨を、細川家の菩提寺である**崇禪寺**に移させました。そして、翌年の1601年、「自分は異教徒であるが、妻はキリシタンであったから、異教の儀式は、彼女を喜ばせることは出来ない。」と言って、彼女の霊魂のために、豪華な**キリスト教のミサ**を、教会で、執り行ってくれるようにオルガンチーノ司祭に頼み、都の教会で、実行に移されました。

ミサは午後3時からささげられ、千人を越す人々が列席しました。

日本人の**ピセンテ・トウイン修道士**が、「神の御名のもとに死する者は幸いなり」という内容で説教をし、説教の終わりに、ガラシャ夫人の、キリシタンとしての徳の高い行ないと死について語りましたので、細川忠興・越中殿とその家来たちはいたく感動し、涙をこらえることが出来ず、ただただ泣くだけでした。

忠興は、ミサのあと、「これほど神聖で、敬虔なものを見ようとは、想像したこともなかった。」と言いました。

細川ガラシャ

- ① 父・夫(おと) しあわせうすき このいのち
話に聞きし キリシタンたち
迷える玉の つぼみふくらむ
- ② 玉造 清原マリアの手によって
受洗の恵み 神の恩寵
玉はガラシャに 花と咲きゆく
- ③ あめつちの 主を知りてこそ うるわしき
花も花なれ 人も人なれ
天の御国(みくに)へ 花は散りゆく

以上、「高山右近・細川ガラシャと大坂」

最後まで、お読みくださって感謝します。

何か、少しでも、お役に立つことがあったのだとしたら、感謝です。

God bless you! God bless us!

主なる神さまの祝福が、皆さんの上に、豊かにありますように。

ありがとうございました。